

2014年3月14日

京都造形芸術大学学長 尾池和夫

京都造形芸術大学博士の称号を授与された芸術専攻（博士課程）4名の皆さん、京都造形芸術大学修士の学位を得られた、芸術文化研究専攻（修士課程）および芸術制作専攻（修士課程）、合計68名の皆さん、学士の学位を得られた芸術学部13学科の合計683名の皆さん、まことにめでたうございます。ご列席の、ご来賓、学校法人瓜生山学園役員、副学長、研究科長、学部長、各専攻長、各学科長、センター長、教職員とともに、学位を受けられたことを、こころからお慶び申し上げます。見守ってこられたご家族の皆さま、おめでたうございます。

今年卒業式を迎える中で多くの方々が、大震災の傷も癒えない最中に高等学校の卒業式を終えて、この京都の春を迎えた皆さんです。希望に胸を膨らませて学舎を巣立つときに起こった天変地異に、14時46分を指したままの時計の前で、自然の猛威を感じ、人間の無力を感じた方もおられたことでしょう。その試練をみごとに乗り切った方たちが、この卒業式の会場にいるのです。これからもさらに力強く、新しい人生の一步を踏み出していだきたいと思います。

入学してからも、皆さんはさまざまな形で大震災と関わってきました。先日、京都市と京都造形芸術大学とNPO法人ボランティア・アーキテクト・ネットワーク代表の坂茂さんとの間の、避難所における紙管を用いた間仕切りの提供・設置を内容とした協定が締結されました。これは東日本大震災の中での経験から生まれた新しい形の災害時への備えのシステムとなるものです。

また、東日本大震災で被災した子どもたちを支援する活動として、東北芸術工科大学と京都造形芸術大学が、共同で立ち上げたプロジェクトに、被災した親子を山形に招く林間学校、キッズ・アート・キャンプ山形の企画や、自主的に避難した母子の交流ピクニックなどの教育支援プロジェクトがありました。

映画学科で、大震災直後にゼミで企画を募った時、多くが「絆」とか「つながり」とかいう話を出してくる中で、募金箱からお金を盗む男の子の話を書いてきた学生がいたという話を聞きました。映画というのは、あえて正しくない生き方をしている人物を据えてどう思うか、学生たちと監督は討論しながらストーリーを作り、福岡芳穂監督の映画「正しく生きる」が制作され、先日春秋座で上映されました。

卒業・修了展を見に来られた方は、瓜生山に14732名に達したそうです。蒼山会の方々も熱心にご覧になりました。多くの作者が作品の前において、自分の制作の思いを語ってくれました。

印象に残った作品を挙げてみたいと思います。映画学科と舞台芸術学科の展示方法がとも優れたものでした。高原校舎では、学生と教職員が一体となって迎えてくれる中で、カレーを味わい物産展を見ました。それと関連した、環境デザイン学科の、酒を飲みながら映画を見るという場の設計が印象的でした。「シネマ～映画と人が出会う場を～」というランドスケープデザインコース、飛永隼人さんの作品で、京都西院を想定して映画館を考えた、飲み屋街の中にある映画館の構想です。これは、後日さらに、林海象先生と Bar 探偵の奥の部屋でそれを実現させようという話に発展しました。

舞台芸術学科の作品では、市川猿之助特別賞の舞台芸術学科演技演出コースの作品「裸足で散歩」を、studio21 で見る機会が得られました。田中佑香さんの演技がすばらしく、音響効果の悪いのを忘れてしまうほどでした。

歴史遺産学科では、岡田文男先生とともに熱心に自分の展示を説明してくれました。文化財保存修復コース劉陽さんの「犀皮技法の復元実験について」が興味深く「一度消えたものを再現するのは難しい。2年かけて作りました」という説明に感動しました。川口真美さんの「高陽院の構成と意匠～文献資料、発掘調査、絵画資料からの検討～」も印象に残りました。

美術工芸学科では、今年も完璧なカタログを、全編英語と日本語で卒展が始まるまでに完成していました。それを手にしたお客様が、多くの作品を買い上げてくれたと聞きました。美術工芸学科のショップやカフェも楽しめました。秋山詩織さんは、眠る顔に惹かれるとして、**Sleeping face** と題する作品を、大きなキャンバスいっぱい膠を用いて油彩で描きました。写真コースの畠山元成さんは、「**The Colors of Hong Kong**」を展示しました。この作品は、2014年9月27日、香港の学生や市民たちによる真の普通選挙を求めての複数の幹線道路を占拠し、長期間に渡るデモで、後に雨傘革命という名のついたこの運動を、現地で記録しようと試みた力作でした。報道写真と違う作品を目指して現地へ行き、占拠した場所に作られた図書館で勉強する学生、テントがあった場所の痕跡、アートワークが剥がされた後の壁の写真などで、しっかりと現場を伝える作品が構成されていました。

マンガ学科は初めての卒業生を送り出しました。久保田沙生（くぼたさき）さんの「ひとつのフィクション或いは絶望のルサンチマン」、原麻里奈さんの「ことばのみちを訪ねれば」など、面白い作品がたくさんありました。

情報デザイン学科先端表現デザインコースの石野恵美さんは、積み木の作品「**bild**」を、本当の石を一つ一つ見て作ったと言います。使っていくうちに角がとれて本当の石ころのようになるそうで、木の種類によって柄も異なり、上に積んだり塀のように横に並べたり遊び方もさまざま、人間館1階にあって、通りがかるたびに、かならず誰かが挑戦しているという人気度1番の作品でした。また、李恩珠（Eunjoo Lee）さんは、建仁寺の庭に見られるような禅の象徴でもある○△□をテーマに、見るだけでなく触れる情報表現という課題に挑戦し、それをこれからの出発点としました。

インテリアデザインコースの池田泰宏さんの「**Rico design factory**」は、**Ricco**「豊か」

というイタリア語からとった題で、永久展示したらと考えるほどの、完成度の高い作品でした。

環境デザイン学科建築コースの蔡岱芸さんは「古曆 in 蔴裡」を制作しました。台湾から徐々に消えていく三合院民家と、大陸本土の客家建築の特徴を取り入れた集落形態の滞在型リゾートホテルを計画しました。私は台湾大学の林教授が進めているジオパーク構想を紹介して、台湾の大地を学ぶジオパークとリンクするような設計にすることを提案しました。つい最近発行された河上眞理さんと清水重敦さんの著書『辰野金吾』には、「美術は建築に応用されざるべからず」という辰野金吾のすばらしい言葉が記録されました。この言葉をくり返しながらか、建築コースの作品をもう一度振り返ってみたいと思います。

ナガオカケンメイ特別賞を受賞した、空間デザイン演出学科の鈴木成美さんの作品「OSAGARI STYLE BOOK」は、さすがのロングライフデザインでした。お母さんのクローゼットに埋もれる20代の頃の服を、娘が着ることで蘇らせたいという「おさがり」のムーブメントを起こすきっかけとなるであろうスタイルブックでした。

卒業式の今日まで、皆さんは学習と制作に、あるいは研究に励んでこられ、さらに課外活動やボランティア活動など、楽しい学園生活を謳歌してこられました。京都造形芸術大学で学位を得た方は、現在までに、博士30名、修士817名、学士9047名になりました。すでに世界の各地で多くの方たちが活躍しています。進学する方も、あるいは社会に活躍する方も、くれぐれも心身の健康に気をつけてすごしてくださるよう祈っております。

今年卒業の皆さんには、徳山詳直さんが提唱した藝術立国の理念への理解を深め、それを後輩に伝えてほしいと、特に願っています。20年後、あるいは50年後にこの学園を皆さんが訪れたときにも「藝術立国之碑」が、大学の理念を伝えているはずで、その理念を今日の式典に参列された皆さんの力で、伝えていってほしいと願って、私の式辞とします。

博士、修士、学士の学位を得られた皆さん、まことにめでとございます。

ありがとうございました。